

## 浄念寺蔵『珂碩上人伝記』に見える奇瑞譚

——中巻を中心に——

飯 野 朋 美

はじめに

稿者は既に、東京都世田谷区の浄真寺（通称、九品仏）を開いた珂碩（元禄七年（一六九四）没）の説話について、『名号威徳物語』（元禄八年序刊）と『九品山縁起』（文化九年（一八一二）跋刊）を比較検討し、同じ話型の説話が、高僧伝から縁起へと変容していったことを述べた。<sup>①</sup>『名号威徳物語』は、珂碩の奇瑞譚が収められている高僧伝である。『九品山縁起』は、開山の珂碩の奇瑞譚のほか、寺宝の由来を語る略縁起である。

この度、珂碩が約十年間住持をつとめた新潟県村上市の浄念寺に伝わる『珂碩上人伝記』を閲覧する機会に恵まれた。浄念寺は快樂山浄念寺といい、もともとは泰叟寺といった。歴代の村上藩主（本多家、榊原家、間部家）の菩提寺であり、珂碩は榊原家の招きにより泰叟寺に入った。また、元禄二年七月一日には、芭蕉と曾良が参詣しており、

『曾良旅日記』にその旨の記述が見える。

本書は既に、『浄真寺仏像修理報告書』<sup>②</sup>に翻刻されているが、解題等は付されていないため、本稿で改めてその内容、性格等について考察してみたい。

### 一 『珂碩上人伝記』の概要

まずは、略解題を示す。

半紙本三巻三冊。

表紙 後補薄香色布目表紙、二十二・七×十七・三糎。その内側に本文共紙原表紙あり。

題簽 後補表紙左肩「珂碩上人伝記 上（中、下）」。  
 内題 「珂碩上人伝記上（中、下）」。

尾題 「珂碩上人傳記上(中) 大尾」。

字面高さ 十八・八糎。

界 なし。

本文 每半葉十行、行十四字内外、漢字平仮名交じり、濁点あり。

墨付丁数 上巻六十丁、中巻五十八丁、下巻四十四丁。

遊紙 下巻末尾に二丁。

備考 蔵書印は、上巻見返しに「ECHIGO / MURAKAMI / SAN /

越後岩船郡 / 堆朱製造所 / 村上 矢部覺平」という朱印、上巻・

中巻最終丁ウに同一と思われる墨印あるも判読不能。

上巻見返しに「明治二十一年 / 戊子八月上幹 / 求之 / 蔵」、上巻

最終丁ウに「寛文六年ヨリ明治二十一年迄 / 二百十五年也」、中

巻最終丁ウに「勝蓮社賢譽上人故阿順彼慈 / 辯大和尚」と、そ

れぞれ墨書。

各巻の内容は、上巻が越後に移る前の時代の九話、中巻が越後村上時代の三十五話、下巻は越後から再び江戸に戻ってからの時代の話などの七話となっている。すなわちほぼ時系列に沿って、珂碩の奇瑞譚が記されている。

作者は未詳だが、中巻の最後に「越後御利益御移住の内の記録有事に候へば委細記すに及はず、御家中聞及ひし計書載畢」とあるので、越後村上藩の領内に住む者と推定できるのではないだろうか。中巻の最終丁ウに「勝蓮社賢譽上人故阿順彼慈 / 辯大和尚」とあるが、残念ながら浄念寺歴代住職の中にも浄真寺歴代住職の中にも該当者はいな

いようである。成立の時期も定かでないが、下巻冒頭の「延宝六年より元禄七年迄九品仏御移住七年の御利益の有増を書しるす」との記述から、元禄七年以降である。上巻見返し並びに上巻最終丁ウに「明治二十一年」との記述があるが、これは本文とは筆跡が異なり後筆であるので、成立・書写年代の推定材料にはならない。

本書が浄念寺の蔵書となった経緯も未詳である。手がかりとしては、上巻の見返しに押印された「ECHIGO / MURAKAMI / SAN / 越後岩船郡 / 堆朱製造所 / 村上 矢部覺平」という蔵書印と、同じく上巻の見返しに記された「明治二十一年 / 戊子八月上幹 / 求之 / 蔵」という識語である。あくまで推測だが、明治の中期に村上の地で堆朱製造を営んでいた矢部氏が本書を入手し、浄念寺に寄進したのではないだろうか。

難産、奇病を見事に解決する珂碩の姿は、『名号威徳物語』や『九品山縁起』と同様、『珂碩上人伝記』上巻にも詳しい。また、中巻冒頭に「此巻より越後村上泰叟寺御住職之内御利益の有増を書記す、村上十一年の御住職と云へ共住居は十年の中なり、寛文八年の秋越後御住移の義事相済、御入院は寛文九年西ノ春越後へ御移住し給へり」とあるように、中巻には村上の地における数々の奇瑞譚が記されている。今回は、その中巻を中心に検討することにする。

## 二 中巻の各話

以下、中巻の各説話のあらすじを示す。

- 1 寛文六年七月十六日の夜に珂碩が靈巖寺で念仏を唱えていると、越後の十川に住む龍女が現れ、三年の内に珂碩が村上に赴く旨の予言をし、血脈と十念を授かりたいと言った。珂碩は龍女の予言通りになることもあるだろうと八寸角に二間半の塔婆を造立した。(龍女の予言)
- 2 越後村上藩主榊原殿の奥方は嫉妬深い女性だった。奥方が臨終の際には雷が鳴り止まず、屋敷から菩提寺の靈巖寺まで棺の上に珂碩が乗って行った。本堂に着いても雷は止まなかった。弟子が珂碩の様子を窺うと地藏菩薩の姿で棺を押さえていた。これらの事を伝え聞いた榊原殿は珂碩に帰依し、村上の泰叟寺の住職になるように要請した。(珂碩が地藏菩薩の姿で棺を押さえたという話／榊原家の殿が珂碩に帰依した経緯)
- 3 以下、村上での話。寝入ると犬のようにうめく老女がいた。珂碩に十念を授けられ、教えの通りに就寝前の念仏を欠かさなければ、うめかなかつた。欠かすと前の通りうめいてしまった。(念仏の利益)
- 4 日頃、仏を拝していた男は、ある日以降、仏にたぬきを取り付いているように思えて拝せなくなってしまった。珂碩に相談し、十念を受けた。それでも改まらず、再び相談すると、十念が心に納まるほどに信心せよ、と助言された。助言通りにすると、何の障りもなく仏を拝することができた。(十念を一心に受けることの大切さ)
- 5 産後に狂乱に陥った女がいたが、珂碩が十念を授けると正氣に返った。(十念の利益)
- 6 発狂した娘を助けてもらうため、珂碩の噂を聞いた親が娘を伴い珂碩のもとに参上した。珂碩と娘の間答から娘には流産した兄が取り憑いていることがわかり、兄に善覺と名づけ、十念を授けた。娘は即座に正氣に返り、一向宗から改宗して浄土宗になった。(十念の利益／浄土宗の優位性)
- 7 ある屋敷の井戸の中から大勢の声が聞こえ、夜にはさらに声が大きくなった。珂碩から遣わされた名号を井戸に沈めると声はやんだ。(名号の利益)
- 8 ある家の下女のもとに、毎晩蛇がやってきて、腹に巻き付いて苦しめられた。珂碩のもとに参詣して十念を受けると、蛇は来なくなり、安堵した。(十念の利益)
- 9 城内の長屋で老人が珂碩の噂を聞き、誘い合わせて十念を受けに行こうとした。誘われた老女は十念を知らず、袋に入れて持ち帰ろうと、袋を用意した。この話を聞いた珂碩は、薄福の輩、後生はどうするのだと言い、目に涙を浮かべた。(民衆を思う珂碩の人柄)
- 10 流産の後、苦しんで理性を失った者の枕元で、珂碩が十念を授けた。すると正氣に戻った。(十念の利益)
- 11 老婆の臨終に珂碩が十念を授けると、老婆は元氣になった。珂碩は老婆に今回の本復は老婆自身の徳によるものであり、往生は近いので、念仏を一万遍唱えるように説いた。老婆は往生の靈夢を見、眠るように亡くなった。(十念の利益／念仏の利益)
- 12 何を食べてもやせ衰えてしまうという奇病にかかった娘が珂碩のもとへ十念を受けにきた。七日で病気が快方にむかい、さらに七日

日参して十念を受けると、全快した。親子共々日蓮宗から浄土宗に改宗した。(十念の利益/浄土宗の優位性)

13 村上城下の成道寺(浄土宗)の和尚は、珂碩と二人で本堂に籠もり、三日三晩水も飲まずに別行を勤めた。成道寺の和尚が少しまどろんで、目を覚まして珂碩を見ると、珂碩は地藏菩薩の化身であり、内陣が光明で明るくなっている状態であった。有難く思った和尚は、その後珂碩の像を造らせ、成道寺本堂に安置した。この像は、度々うなずいた。(珂碩が地藏菩薩の化身であるという話)

14 珂碩が仏菩薩来迎の夢を見た翌日、御勤め中に弟子が障子を開けると、紫の雲がたなびいていた。珂碩が西側の障子を開けると、座像の阿弥陀如来が下渡山と同じ程度の丈になっており、観音勢至も二丈の大きさになっていた。さらに輪光が輝いていた。(珂碩によって示された浄土)

15 14の翌日、名主の母尼が珂碩に十念を拝し、嫁の夢について語る。それは、泰叟寺に天人がたくさん天下り、参詣人も大勢集まっていたところに、熊之介という者が警固についた、というものであった。

(瑞夢)

16 郡奉行が珂碩と対面し、田畑を荒らす原因である海尾の渚の主が、泰叟寺で血脈を受け、成仏をねがっていると話す。珂碩は既に深川時代に龍女が直に願いに來たので、江戸から塔婆を持ってきたことを語り、明日は渚に塔婆を建て、主に名号を渡すように言った。渚の前で法事を行うと、大蛇が現れ、天に昇っていった。(大蛇の濟度)

17 疱瘡を患った女房は、近習の勤めで珂碩の十念を受けた。すると、何をして治らなかつた疱瘡の跡が治った。しかし、女房は日蓮宗だったので、念仏を疑った。そのため、疱瘡がぶり返した。珂碩は、

念仏を疑った罪だ、懺悔させよ、と言った。女房は後悔し、本服した。以後、忍んで十念を受けた。(念仏の利益/浄土宗の優位性)

18 六年もの間、手足が麻痺した男は、一族の者に珂碩の十念を受けるように勧められた。妻は十念を信じていなかったが、代参した者が十念を受けると男は快方に向かった。三日通うと至って元氣になった。妻は心を改め、常々念仏を唱えるようになった。(十念の利益)

19 水を汲もうとして釣瓶を見ると、蛇がいるように見えてしまう男が、珂碩に十念を授けられ、名号を一幅遣わされると、その後は蛇が見えることはなくなった。(十念の利益/名号の利益)

20 十七歳で乱氣した娘を珂碩のもとに連れてゆくと、珂碩は男の所業だと言って十念を授けた。その夜から夢も見ずに眠れるようになったが、又男に首を絞められると言うので、七日間十念を授けてもらいに参り続けた。乱氣はおさまり、よく眠れるようになった。

(十念の利益)

21 食傷の痛みが治らぬ者が、親類がもらってきた名号を腹に当てる と本服した。(名号の利益)

22 寺の下男が頭痛のあまり寝られなくなった。十念を受けると全快したが、直後には十念を唱えなかつた。すると再び寝られなくなり、以後は毎日十念の席に出るようになった。(十念の利益)

- 23 ある百姓の女房が乱気して、夜も寝ずに村中を走り回った。十念を三十遍授けると、本服した。(十念の利益)
- 24 ある中間が口約束を違え、別の女を嫁に迎えた。約束を違えられた女は、氏神の松の木に男の胸と思いながら釘を打ち込んだ。そのため、中間と女房は苦しんだ。病人に十念を授けると、痛みはやんだ。珂碩が、釘を打った者は先に死ぬ筈じゃと言ったのを伝え聞いた女は、釘を抜いた。(十念の利益)
- 25 老衰で尿毒症の症状が出た老女は、十念を授けると快気した。老女は不信心であったが、その後は称名に励んだ。(十念の利益)
- 26 ある子息は、十五歳で夢遊病のような症状になった後、夜中に何者かに前髪を切られた。奉公に出ても同じように前髪を切られ、親元に帰された。珂碩の十念を受けると、その後は何事も起こらなかつた。(十念の利益)
- 27 難産の末に亡くなった女のために珂碩が回向していると、亡くなつたはずの女が現われ、二人で参籠した。見聞の輩は家々に言い伝えたので、化導は日々盛んになった。(珂碩による民衆教化の隆盛なさま)
- 28 十八歳で養子に行つた男が急に他人に食いつくようになった。これは、扱いの悪さを恨む、養家の先代の霊が取り憑いたためであった。泰叟寺で法要を行つて十念を授けると、食いつくことはやめ、念仏を唱えながら往生した。(先祖供養をおろそかにすることへの誠め／十念の利益)
- 29 珂碩の十念を受け、念仏を信心している老女は、極楽浄土の様子を見るようになった。珂碩は、懈怠なく念仏を唱えて往生するように言い、何の品に生まれるかと質問した。老女は、菩薩達に中品か下品だと教えられたと答えた。(十念の利益／念仏の利益)
- 30 江戸在番中に乱気した男は、村上に連れ戻され、座敷牢に閉じ込められていたが、十念により正気に戻り、再び出府した。(十念の利益)
- 31 唾の娘が泰叟寺に参詣し、十念を受けると、南無阿弥陀仏と小さな声で唱えた。有難く思い、七日間日参して念仏すると、話せるようになった。(十念の利益／念仏の利益)
- 32 八歳にして昼夜をわかつた泣き続ける子がいた。十念を授けると、治つた。(十念の利益)
- 33 八歳で極度に他人を恐れる女児がいた。珂碩の十念を受けると、一向に恐れることがなくなった。(十念の利益)
- 34 狐がついた老母に珂碩が十念を授けると、正気に戻り、礼参りをした。その際珂碩は、八十歳になつても後生の志がないから狐に心を奪われるのだ、懈怠なく念仏を唱えよと勧めた。(十念の利益)
- 35 目の上のできものが段々と腫れた者は、十念を三十遍いただくと、治つた。(十念の利益)
- 右に掲げたように、中巻の各説話の主題の多くは「十念の利益」である。中には6や12や17のように浄土宗の優位性を強調するようなものもある。また、9のように珂碩の人柄を表す説話もある。さらに2や13のように珂碩が地藏菩薩の姿で人々の前に現れるという説話もある

る。『九品山縁起』<sup>(3)</sup>にも「貴僧は地蔵菩薩の変作のよし」(上巻「開山本地仏地蔵菩薩の縁起」)とか「珂碩上人は地蔵ぼさつの化身にし」(下巻「珂碩上人御自作御影」)という表現はあるものの、珂碩を地蔵菩薩の化身として具体的に描く説話は、管見の範囲では『珂碩上人伝記』にのみ認められる。『珂碩上人伝記』は、『九品山縁起』を踏まえて作られたと考えてよいのではないだろうか。

### 三 寺宝にまつわる話

1で龍女は、珂碩が村上に赴く旨の預言をし、16で大蛇が昇天するが、このような展開の話は『名号威徳物語』<sup>(4)</sup>上巻「越後国高田不思議有事」から「和尚胎宗寺入院し給ふ事」までの章にも記されていた。『名号威徳物語』と異なるのは、江戸から塔婆を持参したという記事が見えることである。1の時点で「八寸角に二間半」という大きな塔婆を用意し、村入りの際にはほとんど身の回りの品を持たずに、この大きな塔婆をござに包んで持参している。16で建てた塔婆は、江戸からわざわざ持参した塔婆であった。『名号威徳物語』では、江戸から塔婆を持参したという記述はなく、胎宗寺(泰叟寺)入院の翌日に長さ二間の塔婆を造立している。

珂碩没後四年、元禄十一年(一六九八)に珂碩の弟子珂然の撰した『珂碩上人行業記』<sup>(5)</sup>という漢文体の伝記には、越後の悪龍鎮撫譚と、伊豆の龍女済度譚が収められている。越後の話では、珂碩が造立した「教丈」の塔婆を水中に建てるが、造立した場所や具体的な大きさは

記されていない。伊豆の話では江戸で「教丈」の塔婆を造立し、船に積んで伊豆まで運んでいるが、塔婆の大きさが明確でない。『九品山縁起』下巻「伊豆の下田におゐて龍女化益二付民家に念仏を勧め給ふ事」では、江戸で「八寸角に二間半」の塔婆を造立し、船に積んで伊豆まで運んでいる。「八寸角に二間半」という具体的な大きさの提示は、文化九年跋刊の同書を見たねばならない。これは、『珂碩上人伝記』の成立時期を考える材料となるだろう。『珂碩上人伝記』中巻の1と16の説話は『九品山縁起』下巻「伊豆の下田におゐて龍女化益二付民家に念仏を勧め給ふ事」に記された伊豆下田の話を超後村上の話に変えて、膨らませたものようである。とすると、『珂碩上人伝記』の成立は文化九年以降と考えて良いであろう。

また、現在、件の塔婆は浄念寺の本堂に安置されている。『珂碩上人伝記』は単に珂碩の奇瑞を描いているのではなく、寺宝にまつわる話を記しているのである。先ほど作者を越後村上藩の領内に住む者と推定したが、このことを踏まえると、浄念寺に関係があり、浄土宗の唱導に関わっていた者と限定できるのではないだろうか。『名号威徳物語』と同様の話型を持ちながら、寺宝の由来を説明する話になっていることがわかり、大変興味深い。

### おわりに

ここまで書いてきた内容をもう一度簡潔にまとめて示す。

新潟県村上市の浄念寺が所蔵する『珂碩上人伝記』の中巻には、珂

碩が村上の地で起こした奇瑞の数々が収められている。その主題のほとんどは、十念の利益である。

15の説話では、珂碩が江戸から持参した「八寸角に二間半」の塔婆により、大蛇が昇天する。同様の説話を収める『名号威徳物語』では、塔婆は江戸から持参せず、村上で造立している。「八寸角に二間半」という具体的な大きさの塔婆を江戸から持参する話は、文化九年跋刊の『九品山縁起』にみえるが、それは伊豆下田の話であった。『珂碩上人伝記』中巻15の説話は、それを越後村上の話に転用したもので、本書の成立は文化九年以降と推定できる。

また、「八寸角に二間半」の塔婆は浄念寺の本堂に安置されており、『珂碩上人伝記』は寺宝にまつわる説話を収めていることになる。本書の作者は越後村上藩の領内に住む者で、浄念寺と関係があり、浄土宗の唱導に関わっていた者と考えることができよう。

本稿では中巻のみの考察しかなかったが、上巻や下巻については、また稿を改めて検討することにした。

## 注

- (1) 拙稿「九品山浄真寺にまつわる説話の変遷―『名号威徳物語』と『九品山縁起』―」（『大妻国文』第四六号、二〇一五年）。
- (2) 世田谷区教育委員会、一九九〇年。
- (3) 『九品山縁起』の引用は国会図書館蔵本（二二九―二四）による。
- (4) 稿者所蔵。拙稿『名号威徳物語』解題・翻刻（『書物・出版と社会変容』第一八号、二〇一五年）参照。また浄真寺も同書を蔵することがわかった。拙稿「九品山浄真寺蔵『名号威徳物語』について―付、挿絵の

検討―」（『書物・出版と社会変容』第二〇号、二〇一六年）参照。  
 (5) 『浄土宗全書』第一七卷（山喜房仏書林、一九七一年）所収。

## 付記

貴重な資料の閲覧と撮影をご快諾くださった、新潟県村上市の快樂山浄念寺のご住職、井口信道上人に心より御礼申し上げます。

